

二人の探偵 二つの帝国

Two Detectives and Their Empires

原 田 明 子 (作新学院大学人間文化学部)

Harada Akiko (Sakushin Gakuin University, Faculty of Human and Cultural Sciences)

1. はじめに

Edgar Allan Poe は1841年から45年にかけて、アマチュア探偵 Auguste Dupin を主人公とする三篇の探偵小説を書いた。そこに描かれた探偵の人物像や謎解きの手法は、その後の探偵小説の原型となったとみなされている。そして約半世紀の後、1888年から世紀をまたいで、Conan Doyle が世界一有名な探偵、Sherlock Holmes の数々の物語を書いた。それらはポーの探偵小説の特徴を受け継いでいるばかりか、ホームズが初めて登場した第一作 *A Study in Scarlet* 第1部第2章には、デュパンを髣髴とさせる推理力をワトソンから称賛されたホームズが、「デュパンなんてくだらない奴だよ。15分も沈黙した後で、考え込んでいる友人の前で突然もっともらしい意見を述べるあのやりは、本当にわざとらしくて浅薄だ。確かに分析の才はあるけれど、ポーが思っていたほど非凡な人間などではないよ (p.16)」と、挑戦的に返答する箇所さえあり、探偵小説の生みの親としてのポーの影響の強さをうかがい知ることができる。

二人の探偵は、両者とも当時の国際都市を舞台に活躍している。デュパンは若くしてパリで隠遁生活を送り、世間とは隔絶した生活様式を維持しながらも、宮廷の王妃から下町の庶民まで、都市に住むさまざまな階層の難事件を解決する。一方のホームズの物語では、難事件の解決もさることながら、大都市ロンドンの人間模様、日の沈まぬ国と言われた大英帝国ならではの社会事情が、事件の背景として詳しく語られる。ホームズの物語は大英帝国についての物語と言ってもよい。デュパンのパリにはホームズのロンドンのようなリアルな印象はないにしても、二人の探偵はどちらも帝国の大都市に生息し、物語はそうした舞台設定の下で展開されている。

本論では、時代も場所も隔たりのある二人の探偵を分析・比較し、「帝国」というキーワードのもとに、デュパンとホームズの二つの物語がどのように呼応しているのかを考察したい。ホームズの大英帝国はともかく、デュパンの物語に帝国の影を求めることは無理があるように思われるかもしれない。確かに、パリでの探偵の活躍を描いたデュパンの物語には、大英帝国は出てこない。しかし、ポーはデュパンの物語の舞台として、母国であ

る新興国アメリカ合衆国ではなく、当時のフランス帝国の大都市パリを選んだ。帝国の群衆に紛れ込み、とりとめもない瞑想にふける主人公は、帝国の夢に身をゆだねるアメリカ人、ポー自身の、自己愛的な分身であろう。またポーは「群衆の人」で、ロンドンの雑踏に紛れて目的もなく延々と歩き続ける不気味な人物の姿をとらえてもいる。ポーにとって、帝国の大都市をめぐる夢想はイマジネーションをかきたてるテーマであったと思われる。このような視点に立って、二人の探偵が半世紀というタイム・ラグと大西洋を隔てて呼び交わしあう様子を追い、「帝国」の表象としての探偵について考察してみたいと思う。

2. 二人の探偵

ドイルの探偵小説がポーの探偵小説の影響を受けているとはいえ、二人の探偵には、時代や舞台となった場所以外にもいくつかの異なる特徴がある。第一に探偵のキャラクターだが、ドイルの医学部時代の観察力、洞察力に優れた臨床医ベル博士から着想を得たとされる実践家のホームズと、*The Purloined Letter* の数学と詩を愛する夢想家、分析家のデュパンとでは、ともに一風変わった人物とはいえ、*armchair detective* とひとくくりにしてしまうのには無理がある。また、そうしたキャラクターに基いて、探偵の仕事がそれぞれにとってどのような意味を持っているのかということにも違いがある。まずはそれらの点を分析、比較してみたい。

1) デュパンというキャラクター

オーギュスト・デュパンはフランス人で、「かなりの家柄—むしろ名門」（「マリー・ロジェ」によれば *Chevalier* 勲爵士）の出身だが、「様々な不運が重なった結果、経済的に困窮」した状態にあり、世俗的な野心を捨て人との交わりも断って、唯一人心を許せる友人の語り手「私」と、パリの「グロテスクな邸」に引きこもり、読書や夜の散歩を楽しみながら、訪れる人もなく気ままな隠遁生活を送っている。*The Murders in the Rue Morgue* 冒頭の *analysis* についての議論の後に登場する、二人の生活ぶりについての叙述を見てみよう。

… Our seclusion was perfect. We admitted no visitors. Indeed the locality of our retirement had been carefully kept a secret from my own former associates; and it had been many years since Dupin had ceased to know or be known in Paris. We existed within ourselves alone.

It was a freak of fancy in my friend (for what else shall I call it?) to be enamored of the Night for her own sake; and into this *bizarrierie*, as into all his others, I quietly fell; giving myself up to his wild whims with a perfect *abandon*. (Poe 144)

ここには分身のような二人の生活ぶりが記されている。語り手とデュパンは訪問者を一人も寄せ付けず、郊外の邸で気ままな生活を送っている。日の光よりも「夜そのもののために夜の闇を好む」デュパンは、彼に共感する語り手とともに、夜明けとともに鎧戸を閉め、ろうそくの明かりをともし、屋内に夜を作り出して一日を過ごす。日中は読書や会話、夢想、煙草を楽しみながら過ごし、「本当の闇の到来」(the advent of the true Darkness)とともに「静かな観察が与えてくれる無限の精神的興奮を求め」て、夜の街にさまよい出る。

Then we sallied forth into the streets, arm in arm, continuing the topics of the day, or roaming far and wide until a late hour, seeking, amid the wild lights and shadows of the populous city, that infinity of mental excitement which quiet observation can afford. (144)

散策の途中で、デュパンはいつの間にか語り手の思考回路の中に入り込んでいる。語り手が頭の中で思いめぐらせている事柄を見抜き、自然な流れのようにそれについての会話を始め、語り手を驚かせる。この離れ業は、実は冷徹な観察と analysis に基いた当然の帰結なのだが、「夜そのものに魅惑された」散策の途中の出来事とあり、二人がテレパシーで通じ合う分身ででもあるかのような表現になっている。ドッペルゲンガーを描いた *William Wilson* では、自らの分身の影にさいなまれる人物の自己否定的な苦渋に満ちた幻想が描かれているが、デュパンと語り手との関係には、分身のもつもう一つの側面としての自己愛的な要素が押し出されている。

2) 探偵としてのデュパン

探偵としてのデュパンの能力や特徴は、警視総監との比較を通じて表現されている。隠遁生活を送るデュパンのもとに、事件に巻き込まれた被害者が訪れることはない。彼は捜査に行き詰った警視総監や警視庁から依頼されるか、たまたま自分で興味を持った事件とかかわっている。「盗まれた手紙」で仕事を依頼しに来るのは、社会秩序の維持に責任を負っている警視総監である。警視総監は社会的にも精神的にもデュパンとは全く異なる世界の住人なのだが、職責を全うするためにデュパンの力を借りるほかはない。依頼を受けたデュパンは警視総監とは違うアプローチで事件を解決に導く。違いは、警視総監が、個々の人物や物証と接触することを通じて、個人的主観を頼りに事件を解決しようとするのに対し、デュパンは報告や報道を通じて情報を収集し、それらの analysis によって事実を見極めようとするところだ。こうした手法は、二人それぞれの社会とのかかわり方を反映している。

社会性が希薄なように見えるデュパンも、実は、事件を解決することを通じて社会とかかわっている。彼は事件を解決することによって、社会秩序を取り戻そうとする警視総監

の意図に寄与する。警視總監は秩序の回復と自分の名誉の回復に胸を撫でおろすが、デュパンにとってはあくまでも分析を楽しんでいる（「モルグ街」冒頭）に過ぎず、そのことによって、彼を隠居生活にとどめている根本的な不安や不信感が、自分を取り巻く世界から取り除かれるわけではない。また、解決するとはいっても事件はすでに起きてしまっているわけであり、解決後は社会に刻まれた消えない傷となる。事件が探偵自身に与える影響が最も強く印象付けられるのは、「盗まれた手紙」の最期に吐露されるデュパンのD大臣への深い恨みだ。事件を解決したデュパンは現実の社会の生々しい傷跡を一瞬だけ目にして、隠遁生活へと戻る。こうして、事件を解決するという探偵の仕事は、むしろ、個人と社会の根底に横たわる存在論的な不安や疑念を浮き彫りにしてしまう。「探偵」の存在そのものが、そうした社会背景から生み出されたものだといえる。

3) ホームズというキャラクター

シャーロック・ホームズはイギリスの中上流階級に生まれ、オクスブリッジのいずれかを卒業し、「世界でただ一人の民間諮問探偵」を自負する職業探偵である。彼は難解な事件に遭遇すると「猟犬のように」生き生きと反応し、素晴らしい能力を発揮する。しかし、事件に関わっていない時の日常生活は、彼にとって無味乾燥で退屈極まりないもので、自室にこもって化学の実験やバイオリン演奏にふけったり、コカインとモルヒネを交互に注射したりして無聊を慰めながら、やっとの思いで生きている。

事件以外では俗世間と切り離された日常生活を送っているという点では、オーギュスト・デュパンと類似しているが、興味の傾向は異なる。デュパンは文学、哲学、歴史の古典的教養に精通していることが強調されているが、ホームズは探偵業に役立つ化学や植物学、怪奇事件等については博識であるものの、文学や哲学については無知で、天文学に至っては「19世紀に生きる文明人なのに、地球が太陽の周りをまわっていることも知らない」という偏った知識の持ち主だ。

作中でホームズを取り巻く人々の構図も、デュパンものを引き写したかのようだ。デュパンが心を許し、同居している友人兼物語の「語り手」には、ホームズものでは第二次アフガン戦争で負傷した退役軍人 Dr Watson がそれに当たり、名探偵デュパンの凡庸な引き立て役としてのパリ警視庁の警視總監には、ホームズものではレストレード警部らスコットランド・ヤードの刑事たちが該当する。

しかし一方で、ワトソンはホームズの「分身」ではなく、「退役軍人」、「医師」として、大英帝国の中で明確な社会的立場を持つ人物である。彼はホームズとは違い、俗世間、一般社会に順応し、作中で結婚し開業もしている。また、ホームズが敬愛する兄のマイクロフトは、国家機密も扱う政府の上級機関に勤務し、ホームズに機密にかかわる事件を依頼することもある。ホームズは日常生活に飽き、一般社会に順応できない変わり者ではある

が、大英帝国や女王陛下に忠誠を誓う「愛国者」の一面を持ち、マイクロフトを通じて国家権力とも通底している。その点ではボヘミア的なデュパンとは大きく異なる。

4) 探偵としてのホームズ

ワトソンとルームシェアするベーカー街221のBには、捜査に行き詰った警察関係者だけでなく、難事件に巻き込まれたありとあらゆる階層の人々が、ホームズに助けを求めてやってくる。自室で待ち受けるホームズは、依頼人が口を開く前にその人物の職業や境遇、直近の出来事などを言い当てる。それは observation and analysis (「緋色の研究」)、observation and deduction (「四つの署名」) に依っていて、デュパンの analysis と重なる。ホームズはたいいていその場で依頼人に何をすべきか指示を与えると、新聞、雑誌はもちろんさまざまなつてをたどって捜査を開始し、時に変装して潜入し、必要に応じて事件の現場へと急行する。この方法は、主に警視總監の報告や新聞記事によって事件を解明して行くデュパンのそれとは異なる。

彼は自ら依頼人の生活圏に踏み込み、大英帝国の人々の隠された日常を積極的に引き受け、それらを次々と白日の下にさらして行く。そうした作業は暴露的にではなく淡々と機能的になされ、その際、個人的な好悪の感情は棚上げされる。結果としてホームズの物語は、大英帝国とは何か、帝国の人々がどんな経験をしたかについて語られた物語となっている。探偵は事件を通じて人々の日常生活のはころびに入り込み、生身の大英帝国そのものとなって自らを語っているのだ。こうして、大英帝国が自らを語るという構造が成立している。

また、ホームズにとって人々の生活圏に踏み込んで事件を解決するという一見生々しい行為は、退屈に押しつぶされそうな彼のそれ以外の日常生活とは完全に切り離された最高の楽しみであり、解決後にワトソンによって物語に書かれれば、もう彼を侵食することはない。彼が唯一事件の余韻として引きずっているのは、アメリカ人女性アイリーン・アドラーの思い出だ。後に見るように、シャーロック・ホームズのストーリーでは、大英帝国とかつてその一部分であったアメリカ合衆国との関係が、繰り返し思い起こされている。アイリーン・アドラーの余韻には、まさにその関係が、ジェンダーの物語として象徴的に語りなおされているのではないか。

2. ポーの探偵小説と精神の帝国

ポーとドイル、二人の書いた探偵小説には、先に述べたように作品の舞台が「帝国」の「大都市」であることをはじめとして、新聞、オランウータン、外国人などの具体的な項目についても注目すべき共通点および相違点がある。それらに注目しながら、いくつかの

代表的な作品に目を通し、二人の作家、二人の探偵についての理解を深めたい。まずはポーの探偵小説を見ていきたい。

1) *The Murders in the Rue Morgue* (1841)

デュパンが初めて登場したのは「モルグ街の殺人」だ。彼はパリのモルグ街の住宅で母親と娘が殺害された事件を新聞記事で読み、個人的な興味からこの事件を分析し、知り合いの警視總監の許可を得て現場検証を行い、さらに新聞報道を利用して関係者を自分のものとおびき寄せ、事件の解明に成功する。彼は事件解明をだれかに依頼されたわけではなく、「ちょうど、強健な人が筋肉を働かせる運動を喜んで自分の肉体的能力を誇るのと同じように、分析家はものごとを解き明かす知的活動に熱中する。彼は、この才能を発揮できることなら、どんなつまらない仕事でも楽しんでやるのだ。彼は、謎や、難問や、象形文字が好きで、凡人の理解力では超自然とも見えるほどの明敏さで、それらを解き明かす」と説明されているように、自らの能力を発揮したいという欲望から、この事件に取り組んだらしい。

「部屋の中の怪奇な乱雑さ」、犯人の「驚くほどの敏捷さ」、「超人的な力」、「獣のような残虐さ」、「動機無き残忍さ」、「人間性から縁遠いひどく奇怪な行動」、「言葉の聴き取れない声」などの証拠や証言から、誰にもこの残忍な事件の犯人を特定することができなかったが、デュパンは、犯行を犯したのは人間ではなく猛獣、オランウータンであると結論付ける。オランウータンは、フランス人船員がボルネオ島に上陸した際に手に入れ、売買目的でパリに連れ帰ったものであることが判明する。人間の行った残虐行為とされていたものが、実は無邪気でいたずらな猛獣の仕業だったのだ。殺害された母と娘を取り巻く人間関係や出入り業者との利害関係に注目していた警察をはじめとする人々は、そのような日常性とはまったく局面の異なる事実直面させられる。残忍さと無邪気さ、日常的な人間関係とジャングルからもぎ取られてきた非日常。この事件では、国際都市のもつそうした多元的な性格が、人間の意識を超えたものであることが示されている。人間の感覚はその溝を飛び越えられない。デュパンの analysis のみが、その真相を見破ったのである。

2) *The Mystery of Marie Roget* (1842-1843)

「マリー・ロジェの謎」で、ポーは、当時ニューヨークで話題になっていた未解決のメアリ・シンシア・ロジャース殺人事件を、そっくりそのままパリで起きた事件として描き、デュパンに推理させている。ポーは二つの事件の同一性を隠そうともしないばかりか、作品のはじめと終わりに置かれた「偶然の一致」をめぐる論理的考察なるもので読者を煙に巻き、言い換えれば読者サービスに努めている。パリのマリー・ロジェの事件を語るにあたっては現実のニューヨークの事件を扱った11紙もの新聞記事が、人名や地名を書き換

えて総動員され、デュパンは、つまりポーは、それらの記事を精査することのみによって、事件の解明を試みる。その結果、作中でデュパンは首尾よく事件を解決するが、探偵ポーは現実のメアリ殺しの解決には至らなかった。

「マリー・ロジェ」では、「モルグ街」でパリ警視庁に名探偵としての名を知らしめたデュパンに、警視総監が報酬付きで事件の解決を依頼しに来る。デュパンの操作方法は、事件を扱った何種類もの新聞記事を丹念に読んで、それらの中から事実を浮かび上がらせるというものだった。失踪当日の被害者や家族、婚約者の行動、セーヌ河岸に打ち上げられた水死体をめぐる推察、容疑者たちの逮捕と釈放、遺留品の発見、川岸の宿屋の証言、殺害場所の特定など、いくつもの新聞が様々な項目について、それぞれの視点と編集方針とに基づき、方向性の異なる多数の情報を発信している。デュパンはそれらの中から真実の糸をより分けて、最終的に「事実」といえる模様を再現することに成功した。

新聞を利用する際、デュパンが前提としているいくつかの留意点がある。①新聞記事には常に事実がそのまま書かれているわけではなく、しばしば物事が恣意的にゆがめられて書かれている。②大衆はでたらめな新聞記事によっていくらかでも先導されるし、ジャーナリズムもそうすることをためらわない。③探偵は新聞記事の情報の断片の中から真実を発見することができる。さらに「モルグ街」での新聞利用を付け加えれば、④探偵は自ら新聞に虚偽の記事を出して事件解決に役立てることができる。

当時のアメリカは1830年代にいくつもの penny press が人気を博し、1841年には大新聞ニューヨーク・トリビューン紙が創刊されるなど、ジャーナリズムが多くの人々に影響を与えるようになった時代であった。しかし、それと同時にジャーナリズムに対する不信も生まれ、それはとりもなおさず人間不信の現れでもあった。Melville は *Confidence Man* (1860) で、詐欺師に新聞の有用性について語らせている。人々にとって、事実を伝えてくれる新聞の普及は喜ばしいことではあっても、報じられていることのどこまでが本当のことなのかはわからない。探偵自身、④のように新聞報道を捜査のツールとして使うことによって、新聞不信の増大に貢献しているのではないか。だとすれば、そのような新聞記事から構築された真実に、果たして現実のカオスに切り込むことができるのか。デュパンの構築した真実は、常に、砂上の楼閣に過ぎない可能性がある。analysis の外部にある混沌とした「現実」と照合されてはじめて、「真実」の資格を付与されることになるのかもしれない。現実のメアリ殺しを推理したポーには、その僥倖は訪れなかった。同一の事件にかかわったデュパン＝ポーという二人の探偵の、フィクションにおける成功と現実における失敗の二重性を通じて、ポーは自らの探偵小説の成り立ちを明かしている。重なり合った二つの世界がわずかにずれる隙間で、ポーは書いている。

ちなみにパリのマリー・ロジェ殺しの犯人は、彼女の以前からの恋人だった水兵と判明する。彼はしばしば外洋に出ていたため、その存在を認識されておらず、容疑者に上って

こなかったのだ。ここにも帝国主義時代ならではの人間の思わぬ動向が影を落としている。

3) *The Purloined Letter* (1845)

デュパンが自分の analysis によって構築した真実は、どのような手触りのものだったのか。その真実は彼に何をもたらしただのか。それを最も強烈に表現しているのは「盗まれた手紙」である。問題の手紙は王宮の奥の奥で、持ち主である王妃の目の前で D 大臣に奪われ、その後も D 大臣の身近に置いてあるはずである。しかしパリ警視庁の、椅子の縫い目まで調べるほどの緻密な捜査にもかかわらず、手紙はどこにも見当たらない。デュパンは、手紙が見つからないのは警察が手紙の隠し場所を、数学者兼詩人の D 大臣の知性に合わせて推理するのではなく、自分たちの知性やものの見方に合わせて推理しているためだと考える。そして D 大臣宅を訪れ、手紙が最も目立たない場所、状差しの中に、外観を変えて無造作に置かれているのを発見する。

ラカンが『『盗まれた手紙』』についてのゼミナール』で述べているように、この小説の主人公は手紙である。手紙は王妃から D 大臣へ、デュパンへと移動するたびにその意味を変え、そこに価値が生じ、それを取り巻く人々の関係性が複写されて行く。王妃にとっては秘密の恋文であったものが、D 大臣には脅迫の材料、警視総監にとっては国家の安泰の証であり犯罪の証拠となる。手紙それ自体に特定の意味はない。それは人の手を渡りながら変遷する意味を付されていく、空白の存在だ。しかし所有者はそれを所有しているがゆえに、ラカンのいう三すくみの関係性からめとられて行く。二度目の大臣宅への訪問で、デュパンは手紙を手にし、しかし自分なりの意味をそこに付すことはせずに警視総監に渡し、素早く報酬に変える。そうすることで、手紙の価値の連鎖、関係性の連鎖から逃れたかに見える。しかし実は、手紙のもつ意味の空白はデュパンをも呑み込んでいる。彼は D 大臣の状差しから手紙を奪った後、そこに生じた隙間に、過去の恨みを込めた別の手紙を収めておいた。そこにあるのはもはや空白ではなく、そこには彼の内面のブラックホールが書き込まれている。それは彼自身の手紙なのだ。

4. シャーロック・ホームズものにみられる帝国の影

デュパンの登場する探偵小説では、事件の analysis が、結果として彼の内面世界に傷を残していくことが見て取れる。と同時に、analysis という武器を携えて現実にも臨むことで、デュパンは現実の混沌から身を守ろうとしているともいえる。そんな素人探偵に対して、ホームズは『緋色の研究』で、わざわざ批判的な言葉を投げかける一方で、作中のトリックに「モルグ街」へのオマージュを込め、それとなく彼に寄り添っているように見える。

二人の探偵はどのようにつながり、また断絶しているのか。それを考えながら *A Study in Scarlet* (1888年)、*The Sign of the Four* (1890年) を振り返ってみたい。デュパンのパリから半世紀経ったホームズのロンドンでは、正体不明の殺人者も新聞も外国帰りも、もはや探偵のトラウマとなることはなく、大英帝国に生きる人々が生活の中で経験する、好奇心を掻き立てられる現象に過ぎない。二作品はともに大英帝国内部の物語であり、ロンドンでのホームズの探偵活動と、事件の原因となった帝国の辺境での過去の出来事が分けて語られるという構成となっている。

1) *A Study in Scarlet* (1888)

シャーロック・ホームズが初めて登場する『緋色の研究』は、第二次アフガン戦争で負傷し、インドから帰国したばかりのワトソンが、ロンドンで家探しをするところから始まる。主人公の相棒兼語り手である人物が、冒頭からその来歴によって、大英帝国の一員であることを強調して描かれている点に注目したい。また、物語の中心となる事件の原因がアメリカ合衆国にあることから、「日の沈まぬ帝国」の物語であることがうかがえる。

この作品は、ロンドンで起きた不可解な殺人事件を追って犯人逮捕に至るホームズの活躍を描いた第1部と、復讐のための殺人を遂げた犯人、Jefferson Hope の語る、その原因としての過去の出来事の第2部とで構成されている。第1部で描かれる、ロンドン市街での変装をして群衆に紛れたホームズの追跡捜査や、都市の錯綜した人間関係の中で起きた関連するさまざまな出来事と、第2部の時間的にも空間的にも広がりを持つ、アメリカの特殊な閉鎖社会における物語とでは、あまりにもイメージが異なる。しかしそれらは、アメリカがかつては大英帝国の一部分であり、拡大しつつあった帝国の前線であったという歴史的事実によって、独特な意味を帯びてくる。

陸の孤島のようなモルモン教徒の居住地での出来事と、それに対する長年にわたる復讐は極めてショッキングな話ではあるが、ポーの探偵小説のように、この事件がホームズやロンドンの人々にとって何らかのトラウマになる気配はない。それどころか最終章で引用されている事件解決後の新聞記事は、この事件の犯罪性について述べるのではなく、事件を帝国特有の社会現象として扱っている。事件は、“a lesson to all foreigners that they will do wisely to settle their feuds at home, and not to carry them on to British soil” (Doyle p.106) 「すべての外国人に向けられた、敵対関係を英国の地に持ち込まず、故国でうまく解決してから来るようにという教訓」だというのだ。ここでの“foreigners”とは、かつては帝国の一部であったアメリカ合衆国の事件関係者を指している。

広大な帝国の一隅には、本国の人々の想像を絶するような人間関係や、荒々しい生活がある。帝国は、本国に住む人々にとって、資源の供給をはじめ自分たちの生活に利益をもたらす都合の良い地域だが、同時に、イギリスの文明社会とは決定的に異質な要素を持つ

世界だ。『緋色の研究』におけるアメリカの異質さとは、人を容易に生かしてはおかない荒野、集団内での迫害とそこからの逃亡、莫大な富としての天然資源の存在、カルト集団の繁栄などだが、その異界は大西洋を挟んでヨーロッパの文明社会とつながっている。ホームズはそうした人々の移動を追跡して事件を解明する。異界はまさに、イギリスの文明社会を侵食しつつある。上述の新聞記事には、かつて新大陸にイギリス人を植民させ帝国の一部とした大英帝国が、今度は、そこからの人々や文化の逆流を危惧するという心情が吐露されている。

2) *The Sign of the Four* (1890年)

『緋色の研究』が帝国の辺境としてのアメリカを舞台としていたのに対し、『四つの署名』は、帝国の別の重要な地域であるインドと、その近隣の流刑地アンダマン島を舞台としている。この作品では、帝国のカオスが辺境にとどまることなく、ロンドン郊外の住宅地にまで及んでいる様子が強調されている。第一部第三章で、ホームズ一行は馬車でロンドン郊外の見知らぬ場所に案内される。着いたところは“a third-rate suburban dwelling-house”の一角であり、そこに至るまでのロンドン郊外に立ち並ぶ安っぽい新興住宅地は“the monster tentacles which the giant city was throwing out into the country” (124) と表現されている。大英帝国の中心都市ロンドンの触手の先にある目的の家のドアを開ければ、そこはすぐに危険な foreigners の世界であり、帝国の辺境しながら、文明社会からは想像もつかない殺人者が跋扈している。

『四つの署名』の事件の発端は、インド大反乱の混乱の中にあった。インド派遣軍の Arthur Morstan 大尉と John Sholto 少佐は、アンダマン島のイギリス人囚人 Jonathan Small から、インド大反乱の混乱の際にインド人の富豪から奪い取った財宝をだまし取り、イギリス本国に帰国する。帰国後、財宝の所有権をめぐる争いの中で、モーストンは持病の心臓肥大のために命を落とし、その後自らの強欲と良心の呵責に引き裂かれたショルトーは、自分の死後にモーストンの遺児に財宝を分け与えるよう息子たちに命じる。彼は息子たちに、財宝を入手した経緯を以下のように語っている。

When in India, he and I, through a remarkable chain of circumstances, came into possession of a considerable treasure. (129)

ショルトーはモーストンの遺児に対しては良心の呵責を感じていたようだが、インド人の手から奪われ所有者不明となった considerable treasure 「かなりの価値の財宝」を、イギリス人である自分たちが本国に持ち帰ったことについては、なにも問題を感じていない。むしろインドにはそのような幸運が待ち受けているととれる表現である。

しかし、作中のイギリス人たちが帝国の辺境から持ち帰ったのは、財宝だけではなくた。財宝をだまし取られ、復讐に燃えたスモールは、ショルトーらから財宝を奪い返すためにイギリスに帰国する。彼はアンダマン島から原住民の Tonga を従者として連れ帰る。『四つの署名』の物語のサスペンスは、アンダマン島の savage という善悪を超えた非文明、イギリス人から見れば途方もない「悪」が、すばらしい英国人女性、モーストン嬢の身辺に迫っているという危機感である。これは Stoker の Dracula (1897) の、英国人女性が吸血鬼に襲われ、未来の英国人の血が危険にさらされるかもしれない、という恐怖を連想させる。19世紀末、「大英帝国」の自意識は、その境界の内外からの様々な脅威を感じていたのだ。

文明人には想像もつかない能力を持つアンダマン島の savage による犯罪は、もともとポーの『モルグ街』では、オランウータンによる犯罪として表現されていたものだ。オランウータンが savage に代わったのは、大英帝国の自意識のなせる業だろう。テムズ川での追跡場面で savage は、ワトソンの最初の一瞥でニューファンドランド犬と見間違われた後、追跡船がさらに近づくにつれて、容姿の均衡を欠いた醜い人間であることが判明する。

...there was movement in the huddled bundle upon the deck. It straightened itself into a little black man – the smallest I have ever seen – with a great, misshapen head and a shock of tangled, dishevelled hair.

人間の従者にしてよき友である、無邪気で時に獰猛な獵犬と、アンダマン島の savage とを取り違えることで、追手であり主であるイギリス人にとっての両者の近似性が強調されている。イギリス人の目から見れば、savage は人間よりも獣に近いということだ。

Never have I seen features so deeply marked with all bestiality and cruelty. His small eyes glowed and burned with a sombre light, and his thick lips were writhed back from his teeth, which grinned and chattered at us with half animal fury. (178)

ここでは savage と人間との間に一線が引かれており、ホームズは、savage の西洋文明への侵食を必死で食い止めようとする闘いを象徴しているように見える。しかし主であるスモールと従者トンガのように、savage とヨーロッパの住人たちは敵対しているわけではない。広大な帝国のどこかで親密になり、それゆえに起こる文化的な浸食なのだ。

5. おわりに―帝国の末梢神経

ホームズの物語は、広大な大英帝国を築き上げ、今や帝国の辺境の地からの文明の逆流に頭を悩ませている本国のイギリス人が、そのような状況を「大英帝国とはこういうところ」と示してみせた物語と言える。『緋色の研究』で辺境としてのアメリカを舞台とし、『四つの署名』では、アメリカの作家ポーにオランウーランをめぐるオマージュを捧げたドイルは、ポーから、アメリカから何を感じ取っていたのだろうか。ポーは、帝国の辺境からどんなメッセージを発し、ドイルはどう応えたのだろうか。大西洋を隔てた二人の作家の時を経た呼び交わしを、現代の読者が読み解くことはできないだろうか。

パリとロンドンという帝国の大都市を舞台として活躍した二人の探偵だが、それぞれにとっての帝国という舞台を比べてみると、ポーが描いているデュパンのパリは、現実のパリではなく彼の精神の帝国といえる。準爵士という貴族階級の末端に連なる称号を持つデュパンは、パリで隠遁生活を送り、事件の捜査のために外出することはあっても、それらはすべて自らの analysis の延長上で経験される。外的なカオスに抗して、彼は analysis を武器に内面世界の帝国を守り抜こうとする。ポーはまた、実際に起きたメアリー・ロジャース事件の analysis を、ニューヨークの現実においてではなく、パリにいるデュパンの精神の帝国で展開してみせた。しかしパリでのデュパンの鮮やかな事件の解明とは違い、ポーの求める純理論的な analysis は辺境の地アメリカの民主主義の土埃の中では成功しなかった。こうして見ると、ホームズの大英帝国が内外からの危険にさらされているように、デュパンの内面的な帝国も、過去からの感情的な侵食を受けたり（『盗まれた手紙』）、作者の現実がフィクションに侵入したり（『マリー・ロジェ』）と、構造的に不安定なものであることがわかる。

一方で探偵小説以外のポーの物語では、登場人物がしばしば、さまざまな種類の極限的な恐怖を経験する。特に、海洋小説 *The Narrative of Arthur Gordon Pym* (18) では、冒険に憧れた主人公が故郷を離れて世界の海を航海するなかで、暗闇の恐怖、難破の恐怖、飢餓の恐怖、地下に閉じ込められる恐怖など、ほぼ全編にわたって次々に様々な恐怖にさらされる。そして南極点に限りなく近づくと、乳白色の灰が降りしき中、真っ白い肌を持つ巨大な人影が現れ、白人の主人公は恍惚としてその像を迎え、黒人の従者は命を落とす。主人公の冒険が辿り着いたゴールには、whiteness の化身がいた。

主人公はアメリカ人だが、勇敢なアングロ・サクソンとしての彼の大海での冒険は、その先達としての大英帝国の海洋進出、植民地建設の記憶をなぞるものといえる。南極点を目指す彼の whiteness の世界帝国の夢は、上に述べたようなさまざまな恐怖症のトラウマに満ちている。フランス貴族の末端に連なるデュパンの精神の帝国の記述もまた、別のトラウマの世界と背中合わせのところで展開されている。

このようなポーの比喩的な精神の帝国に、半世紀後、ドイルは自分にとっての現実の大英帝国の物語で返答したといえる。そこでは探偵ホームズは帝国の一員であり、帝国の手足となって、イギリス本国の文明的な境界の守備に当たる。Baker Street Irregulars の少年たちはその彼の手足となり、帝国の意識はその末端にまで届いている。一方現実の帝国を、その外側から見つめていたポーにとって、精神の帝国の末梢神経は、ホームズもののように、目に見えるかたちで物理的に侵入者に対抗してはいない。そこでは精神の帝国への夢が反転し、アッシャー家の人々や邸宅のように自らを食いつぶして崩壊することもある。

引用文献

Conan Doyle, *A study in Scarlet & The Sign of the Four* (Wordsworth Classics, 2004).

Edgar allan Poe, *The Complete Tales and Poems of Edgar Allan Poe* (Penguin Books, 1982).

参考文献

Toni Morrison, *Playing in the Dark: Whiteness and the Literary Imagination* (New York: Vintage Books, 1993).

Scott Peeples, *The Afterlife of Edgar Allan Poe* (Camden House, 2004).

太田隆『シャーロック・ホームズの経済学』青弓社、2011

スラヴォイ・ジジエク『汝の症候を楽しめ』鈴木晶訳、筑摩書房、2001

ジャック・ラカン『フロイト理論と精神分析技法における自我—1954-1955 (上)』小出浩之訳、岩波書店、1998